

2012年
5月18日
金曜日

市川文彦 教授（経済史学）

〈快適さ〉追求史の中での 私たちが・・・花粉症Ⅱ文明病論

*聖句…「この世で富んでいる人々に命じなさい。高慢にならず、不確かな富に望みを置くのではなく、わたしたちにすべてのものを豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。」

史的に経済社会間の多様性を明らかにするのが我が専攻領域。そしてお話のテーマは文明病としての花粉症。今朝、舟木 讓先生に読んで頂いた聖句「テモテへの手紙」6・17（*）が問い、我々が注意すべき

は物質的に満ち足りた社会にあって、我々はそれを当然のものとするだけでなく、人にとっての豊かさ総体とは何を失って何を獲得した帰結なのか、時には冷静に、経済学的に自問する必要があるかと思えます。

さて花粉症の発症原因は個人差があるようですが、花粉症には文明病としての側面もあり、近年では文明の発達と花粉症の拡がりとの関係に注目する医学研究も進展。現在では発症例も含めると約2000万人、つまり日本国民の16%が花粉症であると推計されます。花粉症蔓延を

巡り、①先ず1990年代初め以降に重症の花粉症例が増加すること、②次に、この花粉症例急増期以前の、1980年代半ばから公衆衛生上の清潔化Ⅱ下水道整備が著しく進行していた事実が存在します。

この二つの観察結果は、実は相互に関係しています。経済成長と生活水準向上に連動した下水道整備をはじめとする人々の暮らしの着実な清潔化進展が、花粉症への人々の抵抗力、より正確には免疫を低下させていったのであり、この状態が花粉症人口を増やす大きな原因の一つとなっています。

それでは、なぜ衛生上の清潔化、つまり快適な生活スタイル追求化が、アレルギーへの免疫を弱めてしまふのか？ この疑問には、経済史

研究はじめ歴史的接近法がヒントを与えてくれます。下水道が未整備の、つまり現在のように清潔化された時代以前の、高度成長期、またそれ以前の時期の日本の住居では農村部ばかりか都市部近郊でも自宅の庭や家屋内で家畜の牛、馬を飼う事例が極く普通でした。つまり当時の日本人の多くは、日常生活の中で家畜と接していて、その結果、肥料としても用いられる家畜の排出物も身近に。

この清潔化以前に生まれた日本の乳幼児たちは、家畜からの排出物に含まれるエンドトキシンという細菌に幼い頃から晒されることよってアレルギーに対する免疫システムを体内に確立していたのであり、この清潔化時代以前に生まれた人々の花粉症発症は今でも相対的に少数に止まっています。反対に花粉症になり

やすいのは幼い時にエンドトキシンに接することなく育った場合で、家に家畜のいない、水洗トイレが当り前の清潔化された時代の、1960年代末以降に生まれた人々に花粉症が目立つ傾向があります。

この現象が我々に問いかけるのは、人間は自然界の中で元々暮らしていた生き物であって、その中で生かされてきた存在であるという原点。我々人間の都合によってヒトと動物や自然との関係を変えてしまうと、人間の側に却って新たな生物学的負荷もかかってしまう逆説に思いを致しながら、人にとっての豊かさとは何か？を質す今朝の聖句の問いかけへ応えていくのは、他ならぬ皆さん自身です！